

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-770	15-051	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Use of Heavy Drinking Donors in Heart Transplantation is Not Associated With Worse Mortality. 心臓移植におけるドナー側の大量飲酒歴は移植予後生存率の悪化と関連しない		
執筆者		
Taghavi S, Jayarajan SN, Komaroff E, Shiose A, Schwartz D, Hamad E, Alvarez R, Wheatley G, Guy TS, Toyoda Y.		
掲載誌		
Transplantation. 2015 Jun;99(6):1226-30. doi: 10.1097/TP.0000000000000514.		
キーワード		PMID
飲酒、心臓移植、ドナー、予後、死亡率		25606795
要 旨		
目的： 本研究は、同所性心臓移植において、ドナー側の大量飲酒歴による移植予後への影響を評価することを目的とした。		
方法： 2005年から2012年に実施された18歳以上で初回の同所性心臓移植について、臓器移植ネットワーク (UNOS) のデータベースを用いて調査した。1日2ドリンク (1ドリンク=エタノール14g) 以上の慢性的な飲酒を大量飲酒と定義した。大量飲酒歴のあるドナーから臓器提供を受けた患者と、それ以外の慢性的な大量飲酒歴のないドナーから臓器提供を受けた患者のその後の経過を比較した。主要評価項目は全死亡率、副次評価項目は入院中の急性拒絶反応の発現とした。		
結果： 調査期間中の同所性心臓移植は14,928例であり、そのうち2,274例 (15.2%) が大量飲酒歴のあるドナーによるものであった。ドナーが大量飲酒歴を有する移植患者の特徴として、高齢、男性が多い、性別の不一致が少ない、人種の不一致が多い、HLAの不一致が少ないなどであった。一方、大量飲酒歴を有するドナーの特徴として、高齢、男性が多い、大量喫煙者が多いなどであった。ドナーの大量飲酒歴による全死亡率のハザード比は、移植後30日で1.12 (95%信頼区間: 0.90-1.39)、1年で0.96 (95%信頼区間: 0.83-1.11)、5年で1.02 (95%信頼区間: 0.91-1.13) といずれも有意な関連は見られなかった。また入院期間中の急性拒絶反応の発現率は、大量飲酒歴のあるドナー群で12.6%、それ以外のドナー群で16.0% (P<0.001) であった。		
結論： 急性拒絶反応の発現率についてはさらなる検討を要するものの、心臓移植のドナーに大量飲酒歴があっても良好な予後は実現可能と考えられる。		